

自分の考えや気持ち、事実を英語で話す力を高める中学校外国語科学習指導の工夫 — 小学校外国語活動を生かしたスピーチ活動を通して —

庄原市立口和中学校 伊澤 知弥

研究の要約

本研究は、自分の考えや気持ち、事実などを英語で話す力を高める学習指導の工夫について考察したものである。文献研究から、本研究対象である中学校第1学年におけるこの力を、小学校外国語活動で培われてきたコミュニケーション能力の素地を生かし、英語を使って自分の思ったことや感じたこと、日常生活の様子や趣味などを主体的に発信する力とした。この力を育てるために、本研究では、中学校第1学年において、小学校外国語活動や中学校第1学年で学習した表現をまとめた「スピーチお助けシート」を利用して、ペアでの即興スピーチ活動を取り入れた指導を継続的に行った。その結果、使用する語彙や表現が増加し、間違いを恐れず英語を話そうとする意欲に高まりがみられた。このことから、小学校外国語活動を生かしたスピーチ活動を継続的に取り入れることは、自分の考えや気持ち、事実を英語で話す力を高めることに有効であるといえる。

キーワード：小学校外国語活動とのつながり 即興スピーチ

I 研究題目設定の理由

中学校学習指導要領（平成20年）外国語（以下「中学校指導要領」とする）の内容（1）イ「話すこと」に「（イ）自分の考えや気持ち、事実などを聞き手に正しく伝えること。」、また、「（オ）与えられたテーマについて簡単なスピーチをすること。」とあり、指導の重要性が示されている。

平成25年度「基礎・基本」定着状況調査の教科の学習に関する調査において、「自分の考えや気持ち、事実などを英語で話しています。」という項目への本県生徒の肯定的回答は50.7%、また、所属校生徒の肯定的回答は43.8%であり、授業でコミュニケーション活動は行っているが、約半数の生徒にとって英語を話せたと実感できる活動となっていないことが分かった。このことから、生徒に「英語を話せた」という達成感をもたせる活動を仕組んでいくことが必要である。

そこで、本研究において、自分の考えや気持ち、事実を英語で話す力を高めるために、中学校第1学年で、小学校外国語活動を生かした即興のスピーチ活動を継続的に取り入れる。スピーチの際には、小学校外国語活動で扱われた語彙や表現、そして中学校第1学年で学習する語彙や表現をまとめた「スピーチお助けシート」を活用させ、間違いを恐れずにできるだけ多くの語を使ってスピーチをさせる。このスピーチ活動を通して、「話すこと」の学習活動

を活性化させれば、自分の考えや気持ち、事実を英語で話す力を高めることができると考え、本研究題目を設定した。

II 研究の基本的な考え方

1 「自分の考えや気持ち、事実を英語で話す力」について

(1) 「話すこと」について

「話すこと」の目標は、「中学校指導要領」では、「初歩的な英語を用いて自分の考えなどを話すことができるようにする。」と示されている。これについて、中学校学習指導要領解説外国語編（平成20年、以下「中学校解説」とする。）では、「与えられた語句や文を繰り返すことができるだけでなく、自分の考えなどを話すことができることを重視している。」¹⁾と述べられている。また、小学校外国語活動の開始に伴い、「話すこと」の目標から、従来記述されていた「慣れ親しみ」という文言が削除されている。「中学校解説」では、「中学校における『聞くこと』『話すこと』という音声面での指導については、小学校段階での外国語活動を通じて、音声面を中心としたコミュニケーションに対する積極的な態度等の一定の素地が育成されることを踏まえ、指導内容の改善を図る。」²⁾と述べられており、小学校の指導を踏まえた指導の充実が求められている。

(2) 「自分の考えや気持ち、事実を英語で話す力」とは

「中学校指導要領」の「話すこと」の指導事項には、「(イ) 自分の考えや気持ち、事実などを聞き手に正しく伝えること。」と示されている。「中学校解説」には、「ここでの『事実』とは、考えや気持ちなどの主観的なものに対して、客観的なものを意味している。例えば、日常生活の日課や趣味、特技などの個人的なものから一般的・普遍的なものまで幅広く含むものである。」³⁾とある。金子朝子(2008)は、「『話すこと』では、モデルとして与えられた文を機械的に繰り返すなどの基礎的なレベルを超えて、自分の考えなどを伝えるために自分で英語を作り、言えるようになることを目標としている。ここでの自分の考えとは、独創的ではかの人とは違ったアイデアという意味ではなく、自分の思ったこと、感じたことなどを指している。」⁴⁾と述べている。また、指導事項には、「(オ) 与えられたテーマについて簡単なスピーチをすること。」が新たに加わっており、よりまとまった単位で外国語を使用できる力の育成が求められている。

以上(1)(2)より、本研究対象である中学校第1学年における「自分の考えや気持ち、事実を英語で話す力」とは、小学校外国語活動で培われてきたコミュニケーション能力の素地を生かし、英語を使って自分の思ったことや感じたこと、日常生活の様子や趣味などを主体的に発信する力であると捉える。

2 小学校外国語活動を生かしたスピーチ活動について

(1) 小学校外国語活動と中学校外国語科との関わりについて

ア コミュニケーション能力の素地とコミュニケーション能力の基礎とは

小学校学習指導要領(平成20年)外国語活動の目標は「外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませながら、コミュニケーション能力の素地を養う。」と示されている。小学校学習指導要領解説外国語活動編(平成20年)では、「『コミュニケーション能力の素地』とは、小学校段階で外国語活動を通して養われる、言語や文化に対する体験的な理解、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度、外国語の音声や基本的な表現への慣

れ親しみを指したものである。」⁵⁾と述べられている。卯城祐司(2013)は素地について「中学校以降の英語学習につながる、言語への『興味・関心』や『態度』の高まり、そして中学校での4技能の総合的な育成を支える『(音声や基本的な表現への)慣れ親しみ』」⁶⁾と述べている。

中学校では、このコミュニケーション能力の素地を、コミュニケーション能力の基礎へと養うことが求められている。大塚謙二(2012)は「素地と基礎では、前者は積極的に活動に参加する態度の育成を求めており、後者は意欲にプラスして基礎的な英語の運用を求めている。」⁷⁾と述べている。

以上のことから、中学校では、慣れ親しませる段階から、「聞くこと」「話すこと」「読むこと」「書くこと」の4技能をバランスよく育成し、外国語運用能力の基礎を養う必要があるといえる。

イ 中学校スタートカリキュラムについて

現在小学校外国語活動で使用されている“Hi, friends!”で扱う語彙の数は約450語である。また、“Hi, friends!”で扱う各種表現は、中学校検定教科書 NEW HORIZON English Course(平成24年度版)と比較すると、中学校第1学年のUnit1～9、中学校第2学年のUnit4で学習する表現と関連している。「中学校指導要領」の2内容(2)言語活動の取り扱いイ(ア)第1学年における言語活動に「小学校における外国語活動を通じて音声面を中心としたコミュニケーションに対する積極的な態度などの一定の素地が育成されることを踏まえ、身近な言語の使用場面や言語の働きに配慮した言語活動を行わせること。」と示され、小学校と中学校の接続部分の指導を充実させることが求められている。

そこで、本県では、平成24年度から、中学校における外国語教育への円滑な移行と、指導内容の一層の充実を図るため、小学校外国語活動との接続を考えた中学校スタートカリキュラム⁽¹⁾を作成している。このスタートカリキュラムの作成を通して、外国語活動と外国語科との共通点・相違点を理解し、小学校における外国語活動の内容や指導の実態を把握できたことは大きな成果であると考え。今後は授業づくりについての研究を更に進めていくことが必要である。

ウ 小学校外国語活動を生かすとは

萬谷隆一(2013)は、小学校外国語活動で育てるコミュニケーション能力の「素地」について、関心・意欲・態度にかかわる「情意的素地」と音声・表現への慣れ親しみにかかわる「技能的素地」の二つの

側面で考えることができると述べている。そして、図1に示すように、小学校では、情意的素地の育成がより重視されており、技能的素地も伸ばしつつ、情意的素地を十分に育てて中学校に引き継ぐことが重要であるとしている。

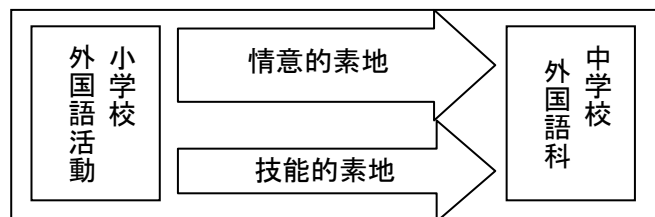


図1 小中素地のつながり⁽²⁾ 萬谷隆一 (2013)

萬谷は、引き継ぐべき情意的素地として、「なんとかわかり、伝えようとする態度」「間違いを恐れない態度」「ことばや文化の違いや共通性への興味」、引き継ぐべき技能的素地として、「聞く力」「音イメージ」「語彙の増強」を挙げている。そして中学校の英語教育では、外国語活動が育てる素地のよさを感じ取り、中学校の授業に生かし、また不十分な面は補うという意識が大切であるとし、この二つの素地を引き継いでいく重要性を述べている。

そこで本研究では、小学校外国語活動を生かすために、小学校外国語活動で身に付けた情意的素地と技能的素地を引き継ぎ、「話すこと」の学習活動を活性化させる中学校第1学年の指導を行い、その有効性を検証していく。

(2) スピーチ活動について

ア スピーチ活動とは

平田和人(2008)は、中学校外国語科におけるスピーチとは、「英語で自分の考えを相手に伝える活動」⁸⁾とし、自分の言いたいことや意見、主張をテーマに沿って述べられるように、指導の工夫が必要であると述べている。また、伊東治己(2008)は、「自分の考えを伝える力、いわゆる自己表現力を養うことこそが現在の日本の英語教育の中での大きな課題の一つといえます。また、人前で自分を表現することは、英語であれ日本語であれ、生きる力にも不可欠な要素であり、さらにはスピーチを始めとするプレゼンテーション能力は社会に出たときにも必要となります。」⁹⁾と、スピーチ指導の意義について述べている。

金谷憲(2009)は、スピーチの後で、聞き手から話し手へ質問させたり、スピーチについてペアやグループで感想や意見を述べ合ったりすることで、スピーチを話し手から聞き手への一方通行的なコミュ

ニケーション活動で終わらせずに、双方向的なコミュニケーション活動を実現することができると述べている。

以上のことから、授業にスピーチを取り入れることは、自分の思いや考え、事実を英語で話す力を高めるために有効であると考ええる。本研究では、スピーチ活動を、スピーチを通して相互に関わり合うコミュニケーション活動と捉え、指導に取り入れる。

イ 「即興性」について

国立教育政策研究所が平成17年に中学校第3学年を対象に行った、特定の課題に関する調査結果(英語:「話すこと」)によると、与えられたテーマについて、30秒間考えたあとに1分間で自由に話をする問題の通過率は32.2%(正答5.6%, 準正答26.6%), 誤答率は56.0%, 無回答率は11.8%であった。誤答では、指示された事項の一部についてしか話していないものが多く見られた。また、準正答でも、指示された事項についてだけ話して終わってしまうものが多く、自ら話題を展開し、適切な英文を考えて話すまでには至っておらず、即興で話をする力には課題が見られる。質問紙調査の結果でも、多くの指導者が、その場でテーマを与えて行うスピーチの指導が不十分であると回答している。

津田雅子(2011)は、用意した文章を暗記してスピーチするだけでは、将来グローバルに活躍する日本人を作り出すことにはつながらず、即興で表現するスピーチへの移行が必要であるとしている。そして人前で即興で話すということは、訓練が必要であり、中学校1年生のある程度言語材料を獲得したあたりから継続的に指導することが必要であると述べている。

そこで本研究では、この「即興性」に着目したスピーチ活動を取り入れる。

ウ 「正確さ」と「流暢さ」について

本研究では、間違いを恐れずに話を続ける発話意欲を高めさせるために、「流暢さ」にポイントを置いた指導を行う。Housenら(2012)によると、「正確さ(accuracy)」とは、構造的に正しい形式の第二言語を産出可能であるか、「流暢さ(fluency)」とは、いかに容易に雄弁で滑らかな産出が可能であるかである。白井恭弘(2012)は、日本の入試では「流暢さ」よりも「正確さ」を問う問題が多く、日本の英語教育は「正確さ」を重視している傾向が強く見られるが、英語習得の過程で誤りがある程度出てくることは仕方のないことであり、習得が進むに従って、自然になくなっていく誤りも多い。誤りが

固定してしまわないように注意し、「正確さ」と「流暢さ」のバランスをとっていくことが大切であると述べている。また、中森誉之（2010）は、発話指導の際に、「正確さ」を強調するあまりに、学習者を萎縮させて発話意欲を低下させないようにする工夫が必要であり、間違いや不完全なものには、適切な指導でフィードバックを与えることが重要であると述べている。

「流暢さ」を分析する指標として、西巖弘（2010）は、1分あたり何語話することができるか（WPM: Words Per Minute）に着目している。次の表1は各学年における1分間のおおよその発話数の目標である。

表1 「流暢さ」の到達目標⁽³⁾ 西巖弘（2010）

学年	中学校 第1学年	中学校 第2学年	中学校 第3学年	高校生 以上
流暢さの 到達目標	20～50 WPM以上	40～60 WPM以上	50～70 WPM以上	60～100 WPM以上

以上のことより、本研究における即興でのスピーチ活動では、発話数が増加し、沈黙時間が減少することを「流暢さ」が高まったと捉える。本研究では、「流暢さ」を高める指導を核とし、小学校や中学校で学習した表現をより多く用いて、間違いを恐れずに話を続ける発話意欲を高めさせる。そして、誤りが固定しないように、適切なフィードバックを行って「正確さ」を身に付けさせていく。

3 小学校外国語活動を生かしたスピーチ活動を取り入れた指導の工夫

これまでのことを踏まえて、本研究では、中学校第1学年において即興のスピーチ活動を行わせる。学習形態はペア活動とし、テーマは小学校外国語活動で慣れ親しんだ語彙を多く使えるものを設定する。また、入門期の学習者であることを考慮して、30秒のスピーチとする。スピーチ活動の際には、図2に示す小学校外国語活動で扱った表現や、中学校第1学年で学ぶ表現などをまとめた「スピーチお助けシート」を用いてスピーチができるようにさせる。

発話数は、「ワードカウンター」を用いて調べさせる。これは、西巖弘（2010）によると、スピーキングのペアワークで、スピーカーの話す英語の単語数を数えるためのカードである。このカードを用いて、一方はスピーチを、他方はスピーチでの発話数を数えさせ、お互いにコメントを言わせる。この活動で、間違いを恐れずにできるだけ多くの語を使って話すことを通して、「流暢さ」を高めさせる。

ある程度スピーチ練習ができた後には、自分の発した文を文字化させる活動を取り入れる。「話す」ということは、音声として発した言葉が一瞬で消えていく行為であり、言い間違いや文法間違いに気付かないことも多く、「書く」という行為でそれを補ったり、語彙、文法、表現、話す順序など、次の活動に生かせる手掛かりを見つけたりすることができる。文字化したスピーチに、自分で書き加えたり修正したりし、指導者が文法などの点検を行い「正確さ」へのフィードバックを行う。

スピーチお助けシート Name()

Let's speak English!
You can do it!

GOAL: 30秒スピーチ（英語で自己紹介）をしよう。

【あいさつ】
Hi. / Hello. / Good morning. / Good afternoon.
How are you? / Thank you. / Nice to meet you.
Good bye. / Bye.

【Be 動詞を使って、「～です。」と自分の名前や出身を言う表現】
I'm ○○. / My name is ○○. / I'm from ○○.

【Be 動詞を使って、「～です。」と自分以外の人のことを言う表現】
He is ○○. / She is ○○.
We are ○○. / They are ○○.

【Do 動詞を使って、「～します。」と言う表現】
I like ○○. I play ○○ every Sunday.
Do you play ○○? I don't play ○○.

【ものや様子を詳しく説明する表現】
○○ is interesting.
○○ is not easy, but it's fun.
I study ○○ hard.
I usually study ○○ on Monday.

【「何？」What を使った表現】
What is your favorite ○○?
What ○○ do you like?

【小学校で使ったことのある表現】
How many ○○? (いくつ?) Let's ○○. (～しよう)
I can ○○. (私は～できる) I can't ○○. (私は～できない)
I want to ○○. (私は○○がしたい)

【お助け Do 動詞リスト】
play (スポーツをする/楽器を演奏する)
study (勉強する) like (好きだ)
have (持っている) use (使う)
know (知っている) eat (食べる)

【お助け形容詞リスト】
interesting (おもしろい) fun (楽しい)
easy (簡単だ) difficult (難しい) big (大きい)
small (小さい) young (若い) cool (かっこいい)
beautiful (美しい) wonderful (すばらしい)
favorite (お気に入りの) good (よい)

【お助け副詞リスト】
hard (熱心に) usually (いつも) sometimes (時々)

図2 スピーチお助けシート

本研究では、このスピーチ活動を帯活動として取り入れる。帯活動について、大田洋（2012）は、「ある一定の期間、授業の一定の時間帯に行う活動」¹⁰⁾と定義し、帯活動を行うに当たっては、帯活動を通して生徒に身に付けさせたい力を明確にし、生徒に目的意識を持って行わせることが重要であると述べている。また、本田敏幸（2012）は、「何事も即座に定着することはあり得ない。何度も何度も言語材料に触れさせ、慣れさせ、使わせて、やっと少しはできるようになっていく。帯活動はこうした『触れさせ、慣れさせ、使わせて』のための活動の場であ

る。」¹¹⁾と、その重要性を述べている。

以上の手順で、この帯活動でのスピーチ活動を継続していけば、間違いを恐れず自分のことを表現する発話意欲が高まり、自分の考えや気持ち、事実を英語で話す力が高まると考える。

Ⅲ 研究の仮説及び検証の視点と方法

1 研究の仮説

中学校第1学年において、小学校外国語活動を生かした継続的なスピーチ活動を通して、「話すこと」の学習活動を活性化させれば、自分の考えや気持ち、事実を英語で話す力を高めることができるだろう。

2 検証の視点と方法

検証の視点と方法を表2に示す。

表2 検証の視点と方法

検証の視点	検証の方法
即興スピーチで、「流暢さ」を高めることができ、間違いを恐れずに話を続ける発話意欲が高まったか。	スピーチ活動での発語数 プレテスト・ポストテストでの発語数
小学校外国語活動を生かしたスピーチ活動が、自分の考えや気持ち、事実を英語で話す力を高めることに有効であったか。	ワークシート、活動の観察 プレテスト・ポストテストの発話内容 事前・事後アンケート

(1) プレテスト・ポストテスト

プレテスト・ポストテストでは、実技テストを実施した。プレテスト・ポストテストともに、1分間話す内容を考え、その後30秒で初対面の人に自己紹介を行わせるものとした。プレテストでは「好きなもの」、ポストテストでは、授業内では扱わなかったテーマである「教科」について触れて自己紹介をするという条件で実施した。なお、実技テストは、生徒の発話をビデオで記録し、発語数、沈黙の時間、発話内容について検証を行った。

(2) 発語数、ワークシート、活動の観察

生徒のスピーチ活動における発語数について、ワードカウンターでの記録を分析した。また、ワークシートのメモや文字化したもの、活動の様子、全体発表でのスピーチを基に検証を行った。

(3) 事前・事後アンケート

生徒の英語学習における「話すこと」に対する意識やスピーチ活動の有効性を把握するために、事前・事後アンケートを4段階評定尺度法、自由記述方式で行った。

Ⅳ 研究授業

1 研究授業の内容

- 期 間 平成26年7月7日～平成26年7月17日
- 対 象 所属校第1学年（1学級14人）
- 単元名 自己紹介
- 目 標
英語で自己紹介をして、自分の好きなものなどを表現することができる。

2 指導計画（全7時間）

次	時	学習活動
一	2	○ 小学校外国語活動や中学校第1学年での既習表現を復習し、ペアで30秒スピーチをする。
二	2	○ 小学校外国語活動で扱った表現、あいさつ、疑問文や否定文などを用いた効果的な表現方法を考え、30秒スピーチをする。
三	2	○ 30秒スピーチを行い、スピーチを文字化し、自分の話した内容を再認識し、改善を図る。
四	1	○ これまでのスピーチからテーマを一つ選び、全体でのスピーチ発表を行う。

3 授業の工夫

- 小学校外国語活動で扱った表現や、中学校第1学年で学ぶ表現を復習し、既習事項を整理するため、毎時間ウォームアップとして「スピーチお助けシート」の口頭練習を行った。このシートはスピーチの際にも活用させた。また、小学校外国語活動で扱った語彙や表現を一覧にまとめたワークシートを作成し、必要に応じて活用させた。
- 1回目から4回目は、「流暢さ」の力の育成を目的とし、「初めて会うALTの妹に自己紹介ビデオレターを作成する」というシチュエーションで即興のスピーチを行った。スピーチに盛り込むテーマを、「食べ物」「スポーツ／楽器」「動物」「趣味」とし、小学校外国語活動で扱った語彙を取り入れやすいテーマを選んだ。また、スピーチの前には2分間のブレインストーミングの時間を設け、メモを取らせるようにした。
- 5、6回目は、「流暢さ」に加えて「正確さ」の力の育成を目的とし、これまでのテーマから各自で選ばせ、同様にスピーチをさせた後に英語で文字化をさせた。文字化の際は、綴りを未習の語も含まれているため、例えば、“tiger”を“タイガー”と書くような文字化も認めた。
- 活動のまとめとして、自分の思いや考えを伝える喜びを味わわせるため、全体でのスピーチ発表を行った。今までのスピーチから一つテーマを決

めさせ、練習を行い、実際にALTの家族へ送るビデオレターDVDを作成した。

V 研究授業の分析と考察

1 即興スピーチで、「流暢さ」を高めることができ、間違いを恐れずに話を続ける発話意欲が高まったか

(1) スピーチ活動における発語数の分析

プレテストの結果と西巖弘（2010）の到達目標を参考にし、以下の表3に示す判断基準を設定した。

表3 プレテスト・ポストテストの判断基準

評価	判断基準
A（十分満足できる）	発語数25語以上
B（おおむね満足できる）	発語数16～24語
C（努力を要する）	発語数15語以下

これを基に、プレテストでA評価だった生徒二人をA群、B評価だった生徒5人をB群、C評価だった生徒7人をC群として検証する。図3は全6回のスピーチ活動における発語数の変化について群別にまとめたものである。

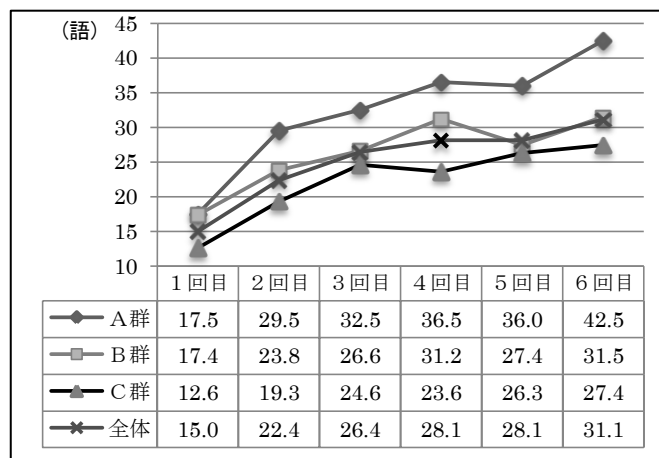


図3 スピーチ活動における発語数の変化

6回目の最終スピーチ活動における発語数の平均は、1回目と比べて、A群2.4倍、B群1.8倍、C群2.2倍、全体平均は2.1倍に増加した。生徒の自己評価記述からは、「語数を増やすことを考えたら、長くしゃべれました」「もう少し違う表現を入れて単語を増やしていきたい」「ペアの人が一生懸命言っていたので、負けないように頑張る」など、活動に対する意欲的な記述が多く見られた。このことから、生徒はスピーチの発語数増加を目標にして、30秒間話し続けることができるようになったと考えられる。

(2) プレテスト・ポストテストにおける発語数の分析

次に、プレテスト・ポストテストの結果を表4のクロス集計で示すとともに、発語数の変化について図4、また5秒以上の沈黙時間があった生徒数を図5のグラフで示す。

表4 プレテスト・ポストテストのクロス集計結果

プレ\ポスト	A評価	B評価	C評価	計(人)
A評価	2			2
B評価	3	2		5
C評価	2	4	1	7
計(人)	7	6	1	14

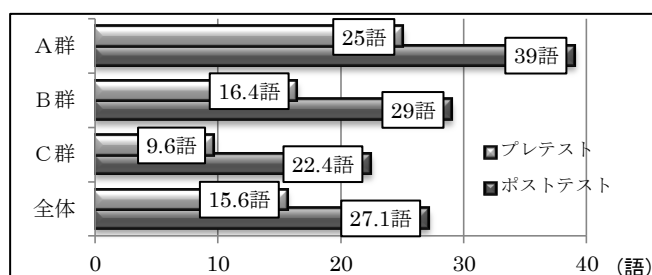


図4 プレテスト・ポストテストの発語数の比較

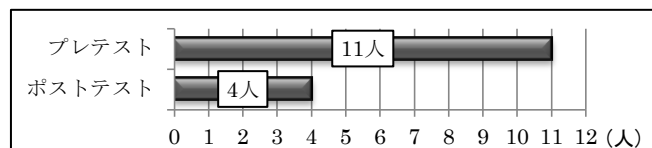


図5 プレテスト・ポストテストで5秒以上の沈黙時間があった生徒数の比較

プレ・ポストテストの発語数を比較すると、A評価の生徒は二人から7人に増加した。そして、プレテストでC評価だった生徒のうち、4人がB評価へ、二人がA評価に上がった。発語数を見ると、全体平均は15.6語から27.1語へと約1.7倍増加した。A群1.6倍、B群1.8倍、C群2.3倍の増加が見られ、特にC群の生徒の増加が大きかった。また、5秒以上の沈黙が続く生徒は11人から4人へと減少し、話を続けようとする意欲の高まりが見られた。特にC群の生徒は、プレテストでは7人全員に沈黙時間が見られた。しかし、ポストテストでは、文法的な誤りはまだ多かったが、沈黙時間のあった生徒は7人中二人に減少した。この結果より、自分の思ったことや感じたこと、日常生活の様子や趣味などを主体的に発信する意欲が向上したと考えられる。

以上(1)(2)の結果から、即興スピーチを通して、「流暢さ」を高めることができ、間違いを恐れずに話を続ける発話意欲が高まったと考える。

2 小学校外国語活動を生かしたスピーチ活動が、自分の考えや気持ち、事実を英語で話す力を高めるために有効であったか

(1) ワークシート、活動の観察による分析

スピーチ発表原稿及び全体発表での発話内容について、個に焦点を当てて検証する。

生徒 a	Hello. My name is ～. Nice to meet you. I'm 12. My birthday is November 8th. I'm from Kuchiwa. What is your hobby? My hobby is playing the piano and crossword. I can play the piano. Playing the piano is fun. Crossword is interesting. I play the piano for 30 minutes every day. Crossword is sometimes. Thank you. Good bye. (60語)
------	--

生徒 a は A 群の生徒であり、1 回目のスピーチにおける発語数は 21 語であった。スピーチ内容を文字化する際、「ここで理由を入れる」などと丁寧に自分で書き加えたり修正したりしていた。また、簡単な理由や頻度など、より詳しく自分のことを表現できるように工夫したことが分かる。

生徒 b	Good morning. My name is ～. I'm from Hiroshima. I like dogs and fish. But I don't have a dog and fish. I don't like frog. Frog is not cute. Do you like frog? I play baseball every day. Baseball is very interesting. Baseball is fun. See you. (48語)
------	--

生徒 b は B 群の生徒であり、1 回目のスピーチにおける発語数は 27 語であった。生徒 b は、当初のスピーチでは、“I am from Japan, Hiroshima, Shobara, Kuchiwa, Kinde.”などで発語数を増やしていたが、ペアの指摘から内容を徐々に変えてスピーチができるようになり、発語数を増やすことだけに捉われず、内容を考えてスピーチができるようになった。

生徒 c	Hi. My name is ～. Nice to meet you. I'm from Shobara. I'm 13. I like sports. I play tennis and ski but I can't snowboard and table tennis. Let's play tennis. I like music, too. I like drum and guitar. Do you like music? Bye. (46語)
------	--

生徒 c は C 群の生徒であり、1 回目のスピーチにおける発語数は 15 語であった。生徒 c は、ペアの相手が使っていた年齢や can を使った表現を自分の表現として取り入れて話すことができ、ペア活動の効果が表れた。

全体を通して、can, want to, Let's, 誕生日など小学校外国語活動で扱った表現を取り入れているものが見られるようになった。そして、疑問文や否定文をうまく取り入れている生徒も増加した。これらは「スピーチお助けシート」や小学校の表現・語彙一覧ワークシートの効果であり、生徒は小学校や中学校で学習した表現や語彙をより多く使って、スピーチができるようになったと考える。アンケート結果からも、全ての生徒がこのシートを活用して、自己表現できるようにしていたことが分かった。

(2) プレテスト・ポストテストにおける発話内容の分析

表 5 は大きな変化が見られた生徒の発話内容である。下線部は、小学校外国語活動で扱ったが、プレ・ポストテスト時点で中学校では未習の語彙や表現である。毎時間復習した小学校外国語活動で扱った表現や語彙がより多く取り入れられている。また、文法的な誤りも見られるが、肯定文だけでなく、疑問文や否定文、簡単な理由づけも積極的に使用できるようになっている。生徒 f は、プレテストでは問題が理解できていなかったが、ポストテストでは、これまでの学習内容を総合して、自信を持って話すことができた。その他の生徒も同様に自分の考えや気持ち、事実を英語で話す力の高まりが見られた。

表 5 プレテスト・ポストテストにおける発話内容

	プレテスト (*●は 5 秒以上の沈黙を表す)	ポストテスト
生徒 d	Nice to meet you. I'm from Japan. I play the piano and <u>violin</u> . I like <u>math</u> and music. I like <u>guratan</u> . ● I drive bike. (24語)	Hello. I'm ～. I'm from Japan. My favorite subject is music. It is interesting. I <u>can</u> play the piano and <u>violin</u> . I don't like subject is <u>social studies</u> . I like <u>violin</u> . <u>I want to be a violin teacher</u> . Good bye. (40語)
生徒 e	Hello. I'm ～. I like volleyball. ● Nice to meet you. ● I like volleyball every day. (15語)	Hello. My name is ～. My favorite subject is <u>P.E.</u> It's interesting. Do you like <u>P.E.</u> ? I like volleyball. I <u>can</u> receive and serve but I <u>can't</u> attack. I <u>want to</u> attack. Good bye. (34語)
生徒 f	Nancy, this is ～. He is like music. He is play tennis. ● (12語)	Hi. I'm ～. Nice to meet you. I'm from Kuchiwa. I like <u>art and craft</u> . It's difficult but it's interesting. I like Japanese, too. I don't like math. Thank you. (30語)

(3) アンケートによる分析

「話すこと」に対する意識を調査した事前・事後アンケートの結果を次の図6に示す。事前アンケートの結果より、「話すこと」への意欲には肯定的回答が多く、また、英語で自分のことを話すことができるという生徒も半数以上いることが分かった。これは小学校外国語活動で、情意的素地が身に付いている結果と考えられる。

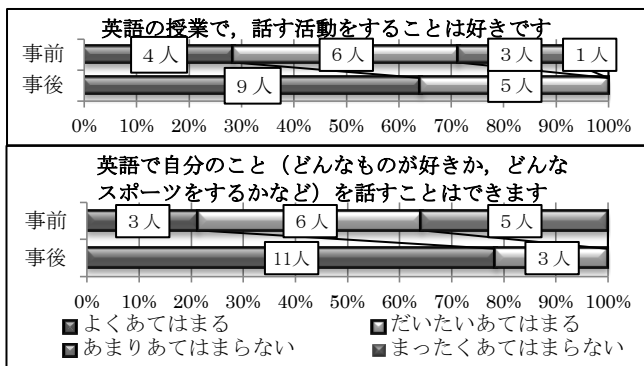


図6 事前・事後アンケートの結果

事後アンケートの結果より、今回のスピーチ活動を通して、英語で自分のことを表現することに自信がもてるようになった生徒の割合が高くなり、情意的素地を引き継ぎ、伸ばすことができたと考えられる。また、事後アンケート「スピーチをする時、お助けシートが役に立った」「毎日のスピーチ活動を通して、これまでよりも英語が話せるようになったと思う」「今回のような英語で話す活動をまたやってみたい」の項目には全員が肯定的回答をし、次のような記述が見られた。

○もっとスピーチの文を増やしたい。そのためにできるだけ単語を覚えてうまく話せるようになりたい。
 ○初めは何を言えばいいか分からなかったけど、小学校や否定文や疑問文も使って詳しく話せるようになった。
 ○友達とやって、「ああ、こんなことも言えるな!」と思うことがたくさんあって勉強になったし楽しかった。

以上(1)(2)(3)の結果から、小学校外国語活動を生かしたスピーチ活動が、自分の考えや気持ち、事実を英語で話す力を高めることに有効であったと考える。

VI 研究の成果と今後の課題

1 研究の成果

- 即興のスピーチ活動で、ペアでの関わり合いをもつことが、発語数を増加させ、情意的素地を引き継ぎ、伸ばすことにつながり、「流暢さ」を高めることに有効であった。
- 「スピーチお助けシート」を用いて、小学校と

中学校の既習事項の知識を活性化させることができ、自分の考えや気持ち、事実を英語で話す力を高めることができた。

2 今後の課題

- ブレインストーミングでメモを取る際、キーワードや構成についてメモが取れるように指導を行い、ブレインストーミングの時間を充実させていく必要がある。メモの取り方を指導することは、その他の技能を高めるためにも有効な手段になると考える。
- 小学校外国語活動との円滑な接続を進め、小学校外国語活動で学習したことが生かせる場面をより多く作る指導の工夫が必要である。

【注】

- (1) 詳しくは、広島県教育委員会ホームページ、小・中学校教育、広島県中学校外国語科スタートカリキュラムを参照されたい。<https://www.pref.hiroshima.lg.jp/site/kyouiku/05junior-1st-eigostart-eigo-start-curriculum-h23.html>
- (2) 萬谷隆一(2013)『改訂小中連携Q&Aと実践 小学校外国語活動と中学校英語をつなぐ40のヒント』開隆堂 p.20に詳しい。
- (3) 西巖弘(2010)『即興で話す英語力を鍛える! ワードカウンターを活用した驚異のスピーキング活動22』明治図書 p.73に詳しい。

【引用文献】

- 1) 文部科学省(平成20年):『中学校学習指導要領解説外国語編』開隆堂 p.8
- 2) 文部科学省(2009):前掲書 p.3
- 3) 文部科学省(2009):前掲書 p.13
- 4) 金子朝子(2008):「英語の目標」『中学校新学習指導要領の展開 外国語科英語編』明治図書 p.29
- 5) 文部科学省(平成20年):『小学校学習指導要領解説外国語活動編』東洋館出版 p.8
- 6) 卯城祐司(2013):『改訂小中連携Q&Aと実践 小学校外国語活動と中学校英語をつなぐ40のヒント』開隆堂 p.8
- 7) 大塚謙二(2012):『成功する小中連携! 生徒を英語好きにする入門期の活動55』明治図書 p.10
- 8) 平田和人(2008):『平成20年改訂 中学校教育課程講座 外国語』ぎょうせい p.24
- 9) 伊東治己(2008):『アウトプット重視の英語授業』教育出版 p.155
- 10) 大田洋(2012):「帯活動の意味」『英語教育』5月号 大修館書店 p.10
- 11) 本田敏幸(2012):「長いスパンで帯活動をプランニングする」『英語教育』5月号 大修館書店 p.13